

都立小中高一貫教育校教育内容等検討委員会（第2回） 会議要旨

- 1 日 時 平成28年6月21日（火）10:00～12:00
- 2 会 場 東京都庁第二本庁舎31階 特別会議室24
- 3 出席者 松本委員長、伊東副委員長、小澤委員、酒井委員、中村委員、井土委員、清水委員、信岡委員、牧野委員、松岡委員、早川委員、粉川委員、出張委員、江藤委員

4 議事概要

- (1) 都立小中高一貫教育校の教育理念等について
事務局からの資料説明後、意見交換

▽ 教育理念・教育方針・生徒の将来の姿について

- 現在の立川国際中等教育学校の教育理念を引き継いだ方が、今いる先生方にとって働きやすいのではないか。
- 生涯学習社会と言われる中で、やはり自分で課題を見つけて学び続けるような、自立という言葉につながるような、自らやっていくとかいうような言葉があれば、現在の立川国際中等教育学校の教育方針を引き継いだ形になるかと思う。
- 共生する、つまり学年を超えた連携というようなものを打ち立てて、教育方針の一つに入れておくと、校内がまとまり、日々の活動につながるはずである。
- 例えば、高校生が小学生のチューデントアシスタントをする、あるいは下級生が英語のできる子なら上級生を教えるなど、コミュニティとしてこの学校を育てていくという発想があれば、社会的インパクトが出てくると思う。

- (2) 都立小中高一貫教育校の教育課程の特色について
事務局からの資料説明後、意見交換

▽ 早期から一貫した英語教育の実施について

- 海外の日本人学校では、1年生から英語活動の授業をやっているというケースをよく見る。そういう時勢になってきたと感じる。
- 英語の能力を身に付けさせるという目標を掲げるなら、小3で週1時間というのは少なすぎる。語学の能力は短い時間で身に付くものではない。どんな技能でも大体毎日3時間というのは当然必要である。英語に関して、「毎日1時間もやらない」ということだと多分忘れてしまって、ほとんど定着が見られない。現状に風穴を空けるような思い切ったバイリンガル教育にシフトするとか、何かそういうことをやらない限りは、何ら新しいことは生まれないと思う。
- 授業時間が週1とか週3で限られていることはよいとしても、例えば、総合的な学習の時間のときにスカイプを活用して、インターナショナルスクールとディ

べートをやるとか、課題学習を家に持ち帰って何かするとか、そういうことをきっかけにして、能動的にかなりの時間に英語に触れる時間を確保するようなチャンネルを用意しておかなければいけない。学校の時間だけで十分な英語の力が身に付くというようなことは期待できないので、課外活動も含めた英語習得のデザインを考える必要がある。

- 学校のICT環境が大事になるだろう。1クラス40人で果たして効果的な英語教育が成立するのか、ネイティブスピーカーをどれだけ常駐させるのかという問題もある。英語教育を目玉にするのであれば、かなり大胆なことをしなければいけない。
- 国語も英語も両方重視する。「日本語もできていないうちに英語を教えるのか」という主張もあるが、小学校入学段階で既に日本語能力は極めて高い。思考言語としての日本語を、彼らは身に付けている。そのレベルまで英語の力を引き上げるためには、また6年ぐらいかかる。通常では、日本語で考えて英語で発信するが、英語で考えて英語で発信してみるなど、そういうふうに切り替えて初めて、極めてバイリンガルに近くなってくる。
- 英語だけでも大変なのに、フランス語、ドイツ語まで導入すると負担が大きいとの議論があるが、それは正しくない。発想を変えて、多言語にチャンネルが開くようにすれば、言語の多様性が身に付き、自由自在にスイッチできるようになる。
- 日本は伝統的に、「まず日本語をしっかりやってから英語」となっているために、何ら抜本的な変化は起きてない。
- 月曜から金曜まで毎日、英語を10分・15分やるということは反復練習であり、1週間に1回よりは、はるかに効果がある。しかも短期集中で、朝の時間15分だけ、例えば「5分何か聞いて10分話す」というようなことを毎日繰り返したら、それは相当効果がある。
- 小学生が高校生と会話をしてもいい。そういう英語を使うコミュニティにしていくという考え方もある。
- 日常的にネイティブの方がいて、掃除もする、食事と一緒に食べる、勉強もするというような、いながらにして学校生活の中で英語を使用する環境があれば、ありがたい。
- 小中高一貫の長い期間、同じ学校で預かるとなると、いわゆる英語嫌いにさせずに、どのようにねらいのところまでもっていくかということが重要である。

▽ 言語能力を向上させる授業の実施について

- 学校教育の中で、意図的に話すこと、聞くことのスキルを付けていかないと、国語だからというだけの理由では、コミュニケーション能力は付かないのではないかと思う。
- コミュニケーション能力に偏ってしまうと、今、議論している思考力の方の言語能力、つまり内言語が軽視されないか、少々危惧する。自分の中でじっくり考えるというプロセスの言語能力というものを、例えば生徒の将来の姿に「高いコミュニケーション力」とは書いてあるが、ここはむしろ「言語能力」として、論

理的な思考力を支える言語能力ということを含めたらよいと思う。

▽ 課題発見・課題解決型の授業の重視について

- 今までの教え込む授業から大きく変えるということを特色とする。ただし、課題探究型とか解決型という授業は教員が慣れていないので、教員研修を事前におかないと、なかなかうまくいかないことが予想される。

▽ 効率的な教育課程の編成等について

- 英語の能力の育成を考えると、例えば留学を小学生段階、少し極論かもしれないが、まとまって生活の中で英語とかかわる機会を、後に持ってくるのではなくて前に持ってくるという発想もあるのではないかと。海外に行くのが難しければ、英会話で一日過ごすような施設が日本国内にもある。
- 小学校課程の場合は「体験」というキーワードがもう少し前面に出てもいいのではないかと思う。小学校段階では、ただ上の中学校の内容をおろしてくるというのではなくて、教育課程の工夫で生み出された時間で、小学生の場合は特に異文化体験をすれば、将来にわたって大きな影響を与えていくと思う。そうした効率的な活動ができるような時間の活用を少し考えてもいいのではないかと思う。
- 学習内容の先取りを行う前提として、先生方は子供の理解度を見つつ、分からなければ分かるまで教え、それでも時間的な余裕が生み出されるような授業を行わなければいけない。
- この教育課程だと、知的な部分が大部分を占めている感じがする。現在の立川国際中等教育学校には、体育祭、文化祭、合唱祭など皆で力を合わせるという感動（につながるもの）を学校活動の中に入れていっている。どのような人間をつくるかというような人間味のある何かを入れてほしい。

都立小中高一貫教育校教育内容等検討委員会（第 1 回）における主な意見

▽ 教育理念・教育方針等について

- グローバルという方向性はよく分かるが、高い語学力といった教育方針が、全て高い英語力に置き換わっている。私は「語学力」イコール「英語力」ではないと考える。当然、国語も英語も、ほかの言語も大事なので、そういう視点をきちんと出していく必要性を感じる。本当のグローバルというか、社会に出るためには、様々な言語が地球上にあるということをお子供たちにも分かってほしい。
- 今回つくるのが小学校だということに照らすと、文化的なアイデンティティの問題もあり、まずは母語の育ちを保障しなければならない。また、語学力というのは、子供が持っている多面的能力のうちの一つのアクセントにすぎないので、子供の発達段階に照らして、子供の生活圏の中での豊かな国際感覚の涵養^{かん}というような視点から、語学力という概念の精査が必要ではないか。
- 語学力というと、どうしても外国語能力という感じが強くなるので、言語能力、あるいはコミュニケーション力などに変えた方がよい。
- 教育方針に、「思考力、判断力、表現力を鍛え…」があるということは、明らかに語学をスキルとして考えているのではなく、能力を育成していく学校だということである。この教育方針を残す限りにおいては、こうした能力に我が国の文化と伝統の理解を合わせて、初めて海外に打っていける子供が育成できるという主張ができるのだと思う。そういう意味で、この教育方針は、非常に意味を持ってくるのではないか。
- （進路として国立や海外の難関大学を目指すエリート校にするかどうかという質問について）それを目指す子供の進路実現が図れる学校にしなければいけないと思うが、それが全てではない部分があると思っている。
- 世界で活躍するためのスキルとして高い語学力が必要である。また、語学ができるだけでは駄目であり、コミュニケーションをとるためには、相手のことが分かって、自分のことも分かるような、そういう人材を育てていかなければならない。
- 語学力という狭い能力では、基礎は支えられないと思う。言語能力という広い表現が非常に大切であり、まずはこれをきちんと打ち出して、その中に英語や日本語、ほかの諸言語の能力が位置付けられるということであると思う。
- 国際語としての英語は、とても必要だと思っており、英語によるコミュニケーション力を伸ばすということは、明確に入れてほしい。
- 「小中高一貫教育の良さ」について、「学習内容の先取り」、そして「児童・生徒の興味や関心を持った学習活動が切れ目なく打ち込める」というのがあるが、特に脳がやわらかい小学生の能力というのは極めて高いものであり、実はそのやわらかさというのは、小学校低学年でかなり発揮される。それを早い段階から見ら

れるというところを分かりやすく、それから一番目立つ形で出していけば、間違いなく特徴のあるいい小学校ができると思う。

▽ 通学範囲・通学時間・通学路について

- 新たに小学生を受け入れるに当たっては、今までの中学生以上を対象としてきたのとは違い、通学時間や通学路の安全対策など、新たに考えなければいけないことがいろいろと出てくる。

▽ 帰国・外国人生徒の入学について

- 「帰国子女や海外からくる児童が本当に国際色豊かなのか」ということもあると思う。実際は、日本に戻ってきてから、言葉のことや勉強、コミュニケーションのことなど、逆にケアが必要だと思う。海外を経験した子供が先生となり、ほかの生徒たちを教えるというような形だけではなく、逆に海外から来た子供たちをケアする仕組みが必要だと思う。

▽ 帰国子女の編入について

- 帰国子女の編入があるかないかは、帰国児童・生徒や外国人児童・生徒の受入れを打ち出すときに、大きな論点になるのではないか。
- この学校にいた児童・生徒が海外に行って、また日本に戻ってきたときにどう受け入れるかというのは非常に重要な考え方だと思う。

▽ その他

- 小学校の開校当初、小学校1年生のみ入学させるとなると、1年生のときの指導がとても大事になると思う。そこをどのように手立てするかという検討が、とても大事なポイントだと思う。

都立小中高一貫教育校教育内容等検討委員会の今後の検討内容

	検討内容（予定）	備 考
第 1 回	<ul style="list-style-type: none"> ・ 設置の基本的枠組み 	平成 28 年 5 月 10 日（火）
第 2 回	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育理念 ・ 生徒の将来の姿 ・ 教育方針 ・ 教育課程の特色 	6 月 21 日（火）
第 3 回	<ul style="list-style-type: none"> ・ 施設の概要 ・ 入学者決定（通学時間等含む） ・ 外国人児童・生徒の受入れ ・ 編入学等 	7 月 29 日（金）
第 4 回	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育課程（特色ある教育活動） 	9 月
第 5 回	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員の体制 ・ 報告書（案） 	11 月
第 6 回	<ul style="list-style-type: none"> ・ 報告書（案） 	平成 29 年 1 月

都立小中高一貫教育校教育内容等検討委員会（第2回）における論点

<論点1>教育理念

- 教育理念について、「次代を担う児童・生徒一人一人の資質や能力を最大限に伸ばさせるとともに、豊かな国際感覚を養い、世界で活躍し貢献できる人間を育成」とすることは適当か。

<論点2>生徒の将来の姿

- 本校を卒業する生徒の将来の姿について、「高いコミュニケーション力を活用して世界の様々な人々と協働するとともに、論理的な思考力を用いて、諸課題を解決し、様々な分野で活躍する人材」としたことは適当か。

<論点3>教育方針

- 教育方針を次の4点にすることは適当か。
 - ア 自己を認識させるとともに思考力を鍛え、課題対応力を高める
 - イ 語学力を育み、言語能力等を向上させる
 - ウ 日本人としての自覚と誇りを持ち、主体的に社会の形成に参画する態度を養う
 - エ 他国の文化等を理解・尊重し、協働して新しい価値を創造する態度を養う

<論点4>教育課程

- 本校の特色ある教育課程について、御意見を頂きたい。
 - ・ 英語での論文作成やディベートを行う力を育てるため、早期から一貫した英語教育を実施する
 - ・ 各教科・総合的な学習の時間において、論理的な説明や議論、論文作成等の言語能力を向上させる授業を実施する
 - ・ 課題発見・課題解決型の授業を重視し、論理的・批判的に考え、判断し、表現する力を育て、課題対応力を向上させる
 - ・ 5教科の学習内容の重複を精査するなど効率的な教育課程の編成や学習内容の先取り等により創出される余裕の時間を活用する

都立小中高一貫教育校の教育理念等

○ 都立小中高一貫教育校の設置に関する検討結果（平成 27 年 11 月 26 日公表）

(1) 教育理念

本校の教育理念は、以下のとおりとすることが適当であるとする。

<教育理念>

次代を担う児童・生徒一人一人の資質や能力を最大限に伸ばさせ、世界で活躍し貢献できる人間を育成

- 高い語学力
- 豊かな国際感覚
- 日本人としての自覚と誇り

世界で活躍し貢献するためには、豊かな教養はもちろんのこと、外国語で意思疎通を図る能力、我が国の歴史、伝統・文化だけでなく異なる文化等についても理解し互いに尊重する態度、自らの思考を筋道立てて論理的に表現する力などの資質や能力を身に付けていく必要がある。

こうしたことを土台として、他者と良好な人間関係を構築し、協調しながら、日々刻々と変化する世界の状況や課題を把握し、目標を立て、その実現に向けて努力することも重要である。このような資質や能力は、OECD のキー・コンピテンシー やアメリカ合衆国の 21 世紀型スキル においても、世界的に求められる共通の資質や能力であると指摘されている。

(2) 生徒の将来の姿

本校を卒業した生徒は、その後、国内外の大学への進学など、それぞれの進路に進む中で、自らの資質や能力を更に向上させ、将来、世界で活躍し貢献する力を身に付け、以下のような人材になるものとする。このことを踏まえ、生徒の将来の姿の実現に必要な資質や能力の基礎を育てていくべきである。

<生徒の将来の姿>

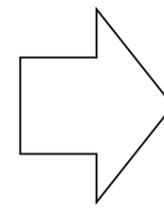
○ 高い語学力を活用して世界の様々な人々と協働するとともに、論理的な思考力を用いて、諸課題を解決し、様々な分野で活躍する人材

(3) 教育方針

本校の教育理念や生徒の将来の姿を踏まえ、特に以下の 4 点を教育方針として重視すべきである。

<教育方針>

- 高い語学力と豊かな国際感覚を育てる
- 思考力、判断力、表現力を鍛え、世界で活躍する力を育てる
- 日本人としての自覚と誇りを持ち、主体的に社会の形成に参画する態度を養う
- 児童・生徒の資質や能力を最大限に伸ばす



○ 変更案

(1) 教育理念

本校の教育理念は、以下のとおりとすることが適当であるとする。

<教育理念>

次代を担う児童・生徒一人一人の資質や能力を最大限に伸ばさせるとともに、豊かな国際感覚を養い、世界で活躍し貢献できる人間を育成

- ~~○ 高い語学力~~
- ~~○ 豊かな国際感覚~~
- ~~○ 日本人としての自覚と誇り~~

世界で活躍し貢献するためには、豊かな教養はもちろんのこと、外国語で意思疎通を図る能力、我が国の歴史、伝統・文化だけでなく異なる文化等についても理解し互いに尊重する態度、自らの思考を筋道立てて論理的に表現する力などの資質や能力を身に付けていく必要がある。

こうしたことを土台として、他者と良好な人間関係を構築し、協調しながら、日々刻々と変化する世界の状況や課題を把握し、目標を立て、その実現に向けて努力することも重要である。このような資質や能力は、OECD のキー・コンピテンシー やアメリカ合衆国の 21 世紀型スキル においても、世界的に求められる共通の資質や能力であると指摘されている。

(2) 生徒の将来の姿

本校を卒業した生徒は、その後、国内外の大学への進学など、それぞれの進路に進む中で、自らの資質や能力を更に向上させ、将来、世界で活躍し貢献する力を身に付け、以下のような人材になるものとする。このことを踏まえ、生徒の将来の姿の実現に必要な資質や能力の基礎を育てていくべきである。

<生徒の将来の姿>

○ 高いコミュニケーション力を活用して世界の様々な人々と協働するとともに、論理的な思考力を用いて、諸課題を解決し、様々な分野で活躍する人材

(3) 教育方針

本校の教育理念や生徒の将来の姿を踏まえ、特に以下の 4 点を教育方針として重視すべきである。

<教育方針>

- ~~○ 児童・生徒の資質や能力を最大限に伸ばす~~
- 自己を認識させるとともに思考力を鍛え、課題対応力を高める
- 語学力を育み、言語能力等を向上させる
- 日本人としての自覚と誇りを持ち、主体的に社会の形成に参画する態度を養う
- 他国の文化等を理解・尊重し、協働して新しい価値を創造する態度を養う

都立小中高一貫教育校の教育課程の特色

◎ 基本構想検討委員会の報告書から (P. 19-20)

(4) 教育課程の特色

ア 授業時数を確保した上で実施する学習内容の先取り

国語、社会、算数・数学、理科、英語の5教科においては、学年を越えて関連する学習内容を効果的に配置し、学習内容の先取りを行う。実施に当たっては、学習内容の重複を精査するなど、効率的な教育課程を編成した上で、例えば、土曜日の活用や週時程の増加によって、授業時数を確保して実施する。

学習内容の先取りは、全ての児童・生徒を対象に実施するが、習熟の程度に応じた指導の実施など、児童・生徒の実態に応じてきめ細かく対応していく。さらに、児童・生徒が学習する上で過度の負担とならないよう配慮し、学習内容に関連する体験活動を取り入れるなどの工夫を行う。

イ 教育課程編成上の余裕の時間の活用

12年間一貫した教育を行う中で、授業時数を確保して学習内容を先取りすることにより、教育課程を編成する上で、余裕の時間を生み出すことができる。その余裕の時間を、例えば海外留学や大学での聴講等、自らの進路選択に関わる専門的な学習に活用する。

その際、余裕の時間を効果的に活用できるよう、活用の時期や方法を工夫するとともに、海外大学への進学等、生徒の幅広い進路希望に応えられるよう、併せてキャリアガイダンスの充実を行うなど、進路指導を重視していく。

ウ 企業や公的機関、大学等との連携

東京都には、多数の企業や公的機関、大学があり、そこには様々な専門的な知識やキャリアを持つ人材が豊富に存在する。これらの企業や施設において、世界を舞台に活躍している人材の講演や就業体験の機会を意図的・計画的に設定することで、世界を舞台に活躍しようとする意欲を培う。

本校では、児童・生徒の成長に応じて、企業等と連携した体験活動を系統性や連続性を重視しながら行うことができるよう、教育課程を編成する。

エ 教科の構成等

本校の教育の特色となる英語教育などを充実する観点から、教科の構成や授業時数の配当を工夫するなどの検討が必要である。

特に、英語や国語においては、論理的な説明や議論、論文作成等の言語能力を養うため、例えば、教科としての英語の早期実施や、総合的な学習の時間を活用して言語能力の向上を目的とした活動を行うなどの取組を行う。

さらに、前述のような生徒の将来の姿を想定し、高等学校において必修科目や選択科目を設定する。また、必要により学校設定科目も開設する。

オ 小学校における教科担任制の段階的な導入

小学校第1学年から第4学年までの児童の多くは、教員に依存する傾向がみられる。このため、児童の1日の生活の様子を一人の教員が把握することが適当であり、原則、学級担任制とする。また、論理的に考えることができるようになる時期に差し掛かる小学校第5学年からは、専門性の高い指導を充実させるため、教科担任制の導入や、定期考査といった中学校の指導方法も、児童の状況を見つつ、段階的に導入していく。